

きぬがさ

東近江市立能登川西小学校

学校だより No.15

令和元年(2019年)12月19日

本当に必要なことを見極める社会へ

武村 節子

ここに、12月12日の読売新聞の紙面があります。

左は、吉野彰(71歳)さん『ノーベル賞授賞式』『責務感じた』の記事。右は中村哲さん(73歳)『告別式』『遺志を心に』の記事。時を同じくして明暗を分けた記事。同じ時代を生きてきたお二方から与えられた衝撃は、わたしの中では、とても大きなものでした。

リチウムイオン電池は、わたしたちの生活を大きく変えることになりました。何年も前からリチウムイオン電池の功績を世界的にたたえられながら、ノーベル賞受賞までの道のりが長かったということは、世の中には同じくらいの功績の方々が多くいらっしゃるって、なかなか順番がまわってこないということなのでしょう。ともあれ、一般企業からの受賞者が、他国にはなく日本にはあるということは、日本のものづくりが世界に誇れることであると思います。

中村さんを知ったのは、情熱大陸とNHK特集のテレビ番組でした。医師としてアフガニスタンに赴いたもののアフガン難民180万人は干ばつで飢えていました。「医者100人より用水路1本を」、薬で命を救えない、食料と水こそが命を救うと、白衣を脱ぐ覚悟をして用水路計画を立てます。時は、米国同時多発テロの報復で、空爆の激しさが増していました。「空爆より用水路を」「食べられる人はISに協力しない、傭兵にならない。」「命の水を」と続けます。やがて、マルクリード用水路はガンベリ砂漠まで届き、緑の大地は10万人の命の大地となります。

現地の人は言います。「家族に食べさせられる農地があり仕事があることは幸せなこと。」幸せな土地では治安が安定し、どちら側の傭兵にもなる必要がありません。「武器をつるはしに持ち替えて忙しく働くと、戦などしている暇がない。」と。

わたしたちは、経済力や軍事力で何かが解決するという錯覚を持ちます。

わたしたちは、時として結果を急ぐあまり今を見過つ場合があります。

わたしたちの大事な子どもたちが出て行く社会は、大なり小なりつまづく場です。しかし、学校は教育内容が多すぎて、今や失敗させている時間がありません。失敗の経験が無いので、失敗に不安な子どもや正解待ちの子どもが増えるのも当然です。さらに子どもたちが今置かれている社会は、容赦のない情報社会です。情報に流されSNSメディアに翻弄され、言葉や経験といった人との結び付きが希薄になり、相手の感情を推し量ったり慮ったりする心の育成がされず、未熟なまま大人になってしまうのではないかと心配します。

昨年も書き添えましたが、子どもはつまづくのが仕事です。つまづくことで起き上がることを学びます。どう起き上がれば良いかだけでなく、つまづかない方法や、時には同じつまづくならどんなふうにつまづくのが良いかも学びます。我々大人が、もっと先を見て、学校もまた失敗に寛容な学校になるようにならなければ、子どもの「やりぬく力」を鍛えることができないと思っています。

今年も残すところわずかとなりました。3学期はまとめの学期です。これからも、子どもたちのための教育に力を尽くしたいと思っておりますので、どうか変わらぬご支援・ご協力の程よろしくお願い致します。

良いお年をお迎えください。



【1年生の算数：写真は本文と関係ありません】